木のぬくもりに包まれて

昨年度から新改築工事を行っていた厚陽小中学校が完成し，４月から新しくなった校舎のもと新学年がスタートしました。

旧厚陽中学校は昭和 35 年に建設され，近年，施設・設備の老朽化が著しく，また，耐震診断では建物の耐震性が低いとの結果が出ました。市教育委員会では，アンケートや地域ワークショップを重ね，厚陽小学校の敷地内に小中一体型の連携教育校を建設することとしました。

木造校舎（西校舎）

新校舎は，厚陽小学校の管理棟を建て替え，教室棟（北校舎）と木造校舎（西校舎）は，大幅な改修を施しました。校舎の外装，内壁，床材にはふんだんに木材を使い，木の“ぬくもり”や“うるおい”をどこにいても感じることのできる佇（たたず）まいになっています。木材には，市北部の市有林から伐採されたヒノキも使っています。また，家具や掲示板なども木材で造っており，木に直接触れながら木の魅力を体感し，森林の果たす役割や必要性について理解を深められる学習環境となっています。

低学年教室前の廊下

小中施設一体型とすることの大きな目的の一つである小学校と中学校の連携に加え，地域との連携をも図ることができるよう，図書室や音楽堂，昇降口などは小学校と中学校とで共用し，毎日，小学生と中学生が自然に交流できるように配置しています。また，地域ボランティアの拠点として地域連携室を設けており，地域の人と児童生徒との交流を促進し，地域に活かされ，地域を活かす学校づくりを進めます。

環境に配慮した校舎

自然の光を採り入れ照明の消費電力を低減し，開口部を大きくとって自然通風を活用する省エネルギーに配慮した構造としています。太陽光発電システムも設置しており，環境問題への関心を高められる施設となっています。

太陽光発電システム（屋上）

厚陽小中連携校の スタートに寄せて

みなさん，新しく生まれ変わった厚陽小中学校を見られたでしょうか。新しい教育への息吹と明るい将来への希望を感じられたことと思います。

小中連携の必要性は，国・県レベルでも数年前から活発に取り上げられるようになりました。しかし，教師にしても保護者にしても長年染みついた小学校，中学校という意識からなかなか抜け出せないという声を聞きます。この既成意識から抜け出し，教育の原点から連携教育に取り組むために，学校校舎から変えようという取り組みが小中一体型校舎なのです。本市では，施設一体型小中連携教育校と呼んでいますが，全国的にはほとんどの場合，小中一貫教育校と呼ばれています。山口県内では初の取り組みといっていいでしょう。

では，施設一体型小中連携教育は何を目指すのかといいますと，異年齢の児童生徒の“縦のつながり”と，地域社会との交流による“横のつながり”を縦糸と横糸にしながら，９年間の一貫した教育方針の後に，自立した社会人の原石を育てることです。この考え方は，教室にも貫かれています。通常の教室よりも広く，机以外のテーブルなどが整備されていることに気づかれたでしょうか。これを我々は，ソーシャルルーム構想（学びと生活の教室）と呼び，授業だけでなく，共同的・社会的な活動ができる教室としてミニ社会として機能するように仕組んでいます。

かつて，松下村塾では幅広い年齢の若者が集い，生活を共にし，生き方や社会について学びました。どういう教育ができるかについて軽々しく述べることはできませんが，教職員や市教委が一体となって，何を目指そうとしているのか分かっていただければと思います。厚陽小中学校は大きく変わります。しっかり見守っていただければと思います。

教育長　江澤 正思